

第六回留学報告書

2015年度 FOS 奨学生 福井真夫

1 日本の研究者像

日本にいた頃は、「研究者とは自分の知りたい真理を追究すべきであり、売れる研究を目指すべきではない」といった主張を耳にタコができるぐらい聞いてきた。僕は納得いった試しがなかった。一般企業の製品開発部門は売れる商品を作ろうと日夜必死になっている。俳優、歌手、お笑い芸人たちの多くはお茶の間のスターを目指して頑張っている。研究者が同様に売れることを目指すのは悪なのだろうか？

僕は、良い論文を読んだときや、画期的な研究発表を聞いたときには、心の底から感動する。そうした感動のあとには、「僕もこういう感動を人に与えたい」と心を焚き付けられる。小学生がプロ野球の逆転ホームランを見て野球選手を目指すようになるのと大差ないように思う。僕はなるべく多くの人が「面白い、新しい」と思うような研究をしたい。それは必然的に良いジャーナルに載る研究、被引用数の多い研究を目指すことにつながってくる。研究が仕事である以上、人から必要とされること、評価されることを目指すことは至って健全だと思う。反対に、僕はいくら自分の知りたいことであっても、誰も面白いと思ってくれないような研究はしたくない。個人的にはそれは趣味であるべきであって、仕事ではないように思う。

経済学者が「売れる研究を目指すべきではない」と発言するのを聞くと驚いてしまう。教科書的な経済学に則れば（市場の失敗がないような状況では）、社会から需要されるものを提供することを目指すのは社会にとって良いことでしかない。それとも社会が今現在必要としないような研究が過少供給されるような市場の失敗があるということなのだろうか？

2 アメリカの研究者像

上記のような主張は日本ではよく耳にしたがアメリカではむしろ対極のような雰囲気を感じる。アメリカの経済学では、Ph.D.取得後に一本の論文を名刺代わりに中央集権的な市場で就職活動をする。その一本の論文の出来でアカデミアに残ることができるかどうかも含めて、ほぼ就職先が決まる。学生の就職先は大学の評判にも関わるので、教授らも自分たちの学生がとにかくとても良い論文を一本書くことにやきもきしている。「自分の知りたい真理を追求しなさい」といった指導をする教授などほとんどいない。

「就職市場で売れる論文を書きなさい」といった内容の指導ばかり受ける。そもそも「誰も面白いと思わないが、自分は知りたいこと」を研究していて就職できなかつたら、その後の研究者生命を絶たれることになる。

今や最先端の経済学研究はほとんどアメリカで生まれる。かたや日本の経済学は世界でのプレゼンスを落としていることが危惧されている。因果はわからないが、無関係ではないように感じてしまう。